2024/9/17（火）

朝の礼拝

聖書　詩編 141 編 1-2 節（旧約聖書 963 頁）

主よ、私はあなたを呼び求めます。
急いで来てください。
あなたに呼びかけるとき
私の声に耳を傾けてください。
私の祈りがあなたの前に
香として供えられますように。
高く上げた両手が夕べの供え物となりますように。

芳しい香り

古代の人々は月の満ち欠けで一日を数えていました。ですから月の出る夕方が一日の始まりです。一日の働きを終え、その日の収穫を焼いて宥めの香りとして、神様に祈りを献げました。それが香を焚き、両手を広げ、天を仰ぎ祈る儀式、礼拝となりました。

去年、初夏の頃、礼拝堂にハトが舞い込んできました。ハトを捕獲して駆除することは禁じられているので、窓を開けて祈る思いで見守りました。三日後、窓際で校長室のトースターでパンを焼き、その香りに誘われたハトは無事、窓から外へ飛び出していきました。

香も炭で燻られ、温められて目に見えない香りが昇ります。祈りも心が温められて、天に届けられるのだと思います。心が温められると、張り詰めた心が砕かれます。砕かれた心は祈りとなって、天に昇るのだと思います。そして慰めと励ましの余韻が心に残ります。

古代の人々は夕べだけでなく朝も終日、香を絶やさなかったそうです。「絶えず祈りなさい」との言葉の通りです。両手を高く広げて、天を仰ぐ姿は、最善を尽くして天命を待つ、愚かな足りない自分を愛し、赦して下さる方を信頼し、すべてを委ねている姿です。

（しばらく黙想しましょう）

慈しみ深い主よ、生きることの困難と困惑に打ちひしがれ、希望を失おうとしている人びとのために祈ります。どうか慈しみのみ手を延べて支えてください。彼らを恵み、その悩みの中から主を仰ぎ見る力を与え、まことの希望を見いだして、主と共にある喜びに与らせてください。今日もすべてをあなたに委ね、よき学びのうちに過ごさせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン